



ガラムマサラの 香る日は

6月10日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

6月10日のおはなし「ガラムマサラの香る日は」

「ウルトラパワーでやまんばおろし、スティンクくさいぞ海坊主！」

掃除機をかけながら上機嫌で母が歌っている。何の歌か、ぼくに聞かないで欲しい。第一に、ぼくも初めて聞く歌だし、第二に、聞き取った歌詞がこれで合っているのかも定かではない。第三に、経験上これはかなりの確度で言えることだが、母の即興の歌である可能性が限りなく高い。本人に聞いたって何の歌かなんて説明できないと思う。うっかりそんなことを尋ねたら「名前を知ったくらいで分かった気になるなんて大きな間違いよ！」とか言われるに決まっている。いや。母はそんな理路整然としたことは言わないか。

「サンバもマンボもいらわないわ、だってサマンサ奥様は魔女だったのですから」

もう歌にもなっていない。なのに本人は上機嫌だ。よく誤解されるのだが、ぼくの母は別にどこか悪いところがあるわけじゃない。ちょっと変わった人だと思われていることは隠しようもない事実だが、他人に迷惑をかけるとか、トラブルを引き起こすとか、取りたてて問題になるようなことはない。たとえばよく聞かれるように、本当なら病院に入院させるべきだとか、社会生活に支障があるとか、そういうことは一切ない。これは恐らく世界で一番迷惑しているぼくが言うんだから間違いない。

家の中はいつもきちんと片付いているし、ゴミの分別はもちろん、家計簿に始まり税金の計算まできちんきちんとやっている。料理も上手だ。だしをとったり、ジャムを煮込んだり、手間のかかる料理の下ごしらえをしたりしている母はほとんど嬉々として見える。その様子は、色とりどりの薬品を入れた試験管に囲まれ、フラスコから噴き上がる蒸気の中、薬品を調合するマッドサイエンティストの姿を思わせないでもないが、その実験の成果はとてもおいしい食事なのだから文句は言えない。

確かに料理の見た目は風変わりなことが多い。それは否定できない。ちなみに昨日はテーブル一杯に集積回路のようなものが広がっていた。トルティーヤでできたベースの上にインゲン豆、レタス、トマトやチーズなどさまざまな具材が整然と並んでいて、これにチリコンカルネと合わせて食べるというものだった。〈チリコンバレー〉という料理の名前を聞いて、ぼくは不覚にも噴き出してしまった。あのときの母の得意そうな顔つきと言ったら！

食べた後の洗い物はあまり好きじゃないらしく、ぼくが手伝うことも多いけれど、一方で洗濯物は大好きみたいだ。洗い物と洗濯物の間にどんな違いがあるのかぼくにはわからないが、母に言わせると全然まるきり別物らしい。手洗いと洗濯機のものを選び分ける瞬間から、アイロン掛けをしたり畳んで筆筒やクローゼットにしまう瞬間まで洗濯という行為の隅から隅まで好きら

しい。掃除は週に2回徹底的にやる。年末が来たのかと思うくらい徹底的にやる。「まなじりを決して」とはこういうことかと思うような顔つきで徹底的にやる。

でも今日は少し様子が違う。そんな不退転の決意みたいな雰囲気はない。むしろとても楽しそうに見える。

「風の間に関にさまよう人よ、クイクワイマニマニマニマニダスキン家事代行」
楽しそうどころではない。ノリノリと言ってもいいだろう。

ノリノリの掃除機がけを終えると、意外なことに母は、大掃除は始めずにメイクをして、買い物に行って来ると飛び出して行った。これも珍しい。買い物と言うと、ぼくを連れていくのが常なのに今日は1人で出て行った。ふだんならぼくが本を読んでいる途中だからと嫌がっても無理矢理連れ出すのに、今日は鏡台の前に座りながら「あなたと電話とどっちが上手に留守番できるか競争よ、幼稚園児！」と決めつけて出て行った。言い忘れていたが、ぼくは聖イグナティウス修道院付属南山手幼稚園に通う、いわゆる年長さんだ。

帰って来た母が料理を始めたのを見て、ぼくは震えるような衝撃を受けた。父さんが帰って来るんだ！ 今日、父さんが帰って来るんだ。それで何もかも説明がつく。ノリノリの掃除。丁寧なメイク。そして特別な日にしかつからない、ガラムマサラの香りが立ちこめるキッチン。シナモン、クローブ、ナツメグにカルダモン、粒胡椒、クミン、ベイリーフ。ズラリと並んだスパイスたち。サモサの皮。羊肉。間違いない。父さんが帰って来るんだ！

そのことをぼくに告げないのは、びっくりさせるつもりなんだろうが、バレバレである。あらゆる状況証拠がそれを指し示している。

母が歌い出す。

「富士山を見守る巨樹s。巨樹sを見守るおとうさん」

ぼくはもう笑いをこらえきれなくなるが、黙って知らんぷりをしていた。富士山がおとうさんとして、巨樹sっていうのがぼくらのことなんだろうか？ 歌詞を教えてくれたらぼくも一緒に歌うのに。

* * *

でも結局その日おとうさんは帰って来なかった。母は平気な顔をして豪華なインド料理を出した。ぼくらは平気な顔をして冗談を言って、辛い辛いと騒ぎながら楽しく夕食を終えた。夜中、涙が止まらなくなって母のベッドに行くと、母はぼくをふとんに入れてくれて強く抱きしめてくれた。抱きしめ方が強過ぎて痛かったせいだろう。ぼくはそれからしばらく声を上げて泣いてしまった。

(「富士山を見守る巨樹 s」 ordered by ハンサム-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」
をご活用ください。

ガラムマサラの香る日は

<http://p.booklog.jp/book/40815>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40815>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40815>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.